

SKILL 'UMI' TTE  
NANDESUKA?

スキル

海

ってなんですか？

≡ 使えないと思っていたユニークスキルは、≡

≡ 海にも他人のアイテムボックスにも入れる≡

≡ 規格外の力でした。≡

2

陰 陽

YINYANG

Illust.

キャナリーヌ

カナン

主人公が持つ  
ペンダントに宿る精霊。  
人間たちの常識に  
疎い。

ザラ・アウラ・  
スティビア

リーグラ王国の第一王女。  
妹想いの  
しっかり者。

エンジュ・マオユ・  
スティビア

リーグラ王国の第二王女。  
無邪気でわがままな  
ところがある。

セオドア・  
ラウマン

アレックスの叔父。  
大らかだが  
ドジな一面がある。

オフィリア・  
オーウェンス

アレックスの元婚約者。  
高い魔力を  
保持している。

ヒルデ・  
ガルド

アレックスに護衛として  
雇われた冒険者。  
努力家で気が強い  
性格。

アレックス・  
キャベンディッシュ

キャベンディッシュ家の長男。  
謎のスキル【海】のせいで  
実家から放逐された後、  
叔父のもとで商人の道を  
歩み始める。



## 第一話 冒険者の心得

僕はアレックス。侯爵家の跡取り息子だったけど、家を継ぐために必要な魔法スキルが発現しなかったことで、実家から追い出されてしまった。

弟のリアムに家督を譲り、オフィーリアとの婚約も破棄することになったんだ。

そんな僕が神さまからもらったギフトは、スキル〈海〉というもの。今まで誰も手にしたことのないユニークスキルだそうさ。

最初は使い道がよくわからなかったけど、少し練習するうちに魚や塩など海で採れるものなら何でも手に入る力だと判明した。

僕はこの力で商人として成り上がることに決めた。

父さまの弟である、元Sランク冒険者のセオドア叔父さんの家に住まわせてもらえることにもなり、叔父さんの家で再スタートすることにした。

けどこのスキルには、もっと秘密が隠されていた。

それに気付いたのは、レベルがどんどん上がって、新たな力が次々と目覚め始めた頃だ。

レベルアップして解放された〈時空の海〉は、アイテムボックスという何でも収納できる能力。

それも他人のアイテムボックスに干渉できる規格外の力だった。

今の段階だと、亡くなった人のアイテムボックスにしか干渉できないけど、さらにレベルが上がったら、いずれ生きている人にも干渉できるのかな……？

ちなみに、この世界の法では、亡くなった人のアイテムボックスの中身は所有者がいないという扱いだから、自分の物にして問題ない。

そもそも僕以外に他人のアイテムボックスの中に自由に行き来できる人がいないんだけど……見つけたアイテムボックスの中身はお宝ザクザク！

これだけで一気に大金持ちだよ！ と思っていたら、伝説級の武器や僕を守護したいというカナンという名前の精霊まで手に入れちゃった。

そんな感じでスキルの強化に驚きながらも、叔父さんのもとで鍛錬を続けていたある日、僕たちの前にデビルスネークが襲来してきた。

僕を追って叔父さんの家までやってきた婚約者のオフィーリアや冒険者仲間のヒルデを守るために初めての戦闘に臨んだんだけど、戦いでもスキル《海》が大活躍。

扉から大量の水を出して撃退に成功した。そして、毎回レベルアップするたびに聞こえていた声が突然僕に話しかけてきた。

あれはいつたいたんだっただろう？

明らかにいつものお知らせと違って僕に語りかけていたような……。

そんなことを考えていたところで、ふと大事なことを思い出したのだった。

「そういえばオフィーリア嬢は！」

さっきまで他のことを優先して、オフィーリア嬢のことを気にかけていなかった。

案の定、オフィーリア嬢は、護衛のジャックさんとグレースさんと一緒に玄関の近くで待っててくれた。

僕が声をかけなかったから、礼儀として勝手に家に入らないようにしたのだろう。

すぐに駆け寄り、僕は平身低頭で謝り続けた。

オフィーリア嬢が、アレックスさまらしいですわね、と微笑む。

オフィーリア嬢は優しく許してくれたけど、万が一残っていたデビルスネークが襲ってきて、家に逃げ込むのが間に合わなかったらと思うと……。

3人を危険な目に遭わせてしまったってことだ。

目の前のことにばかり集中する癖を治さないとなあ……。

オフィーリア嬢とジャックさんたちと一緒に家の中で待機していると、程なくして叔父さんが、たくさんの冒険者たちと、冒険者ギルドの職員さんたちを引き連れて戻ってきた。

叔父さんたちは、まだデビルスネークの子どもたちが残っていないか調べるために、これから簡単に山狩りを行うそうだ。

数時間後、戻ってきた叔父さんから話を聞くと、デビルスネークの亜種の子どもたちが何体か残っていたらしい。

冒険者たちが討伐した証拠として、尻尾を切って帰ってきたそうだ。

デビルスネークは、尻尾を持ち帰ることでクエスト完了になるので、必ず持ち帰る決まりになっているんだって。

それから、ヒルデも前の戦いで僕たちの家に逃げ込む前に、子どもたちを何体か倒していたそう。

冒険者の1人が、切られた尻尾が落ちていたよと、叔父さんに渡しているのを見た。

「お前がヒルデに渡してあげたらしい」

叔父さんがそう言って尻尾を寄越したので、僕はそれらをまとめて預かった。

ヒルデが切り落とした尻尾が見つかってよかったよ。

クエストは失敗を何度も繰り返すと、ランクが下がる仕組みだけど、何かしら成果があれば話は別だ。

今回で言えば、子どもだけでも倒したと分かれば、ランクの降格までは至らないだろう。

調査が終わると、デビルスネークの討伐隊についてきていた、冒険者ギルドの職員さんが話しかけてきた。

用件は、冒険者ギルドまで被害報告にいらしてくださいという招集のお願いだった。

僕が倒したデビルスネークについての報告と、その場に居合わせたオフィーリア嬢たちの被害の報告が必要なんだって。

国や領主が討伐隊を組織するような魔物の場合、受けた被害を保証してもらえることがあるから、程度にかかわらず、冒険者ギルドに報告する必要があるんだってさ。なるほどね。

安全も確認できたし、ヒルデにデビルスネークの尻尾を渡す用もあるから、そのついでに冒険者ギルドに行こうという話になった。

僕は叔父さんの馬車に乗せてもらい、オフィーリア嬢はグレースさんとジャックさんと一緒に自分の馬車でギルドへ向かったんだけど……。

当然よく目立った。

なにせ貴族の馬車な上に、オフィーリア嬢のは特別仕様なもの。

貴族が魔物の被害に遭ったということで、冒険者ギルドは大騒ぎになっていたと叔父さんが教えてくれた。

普段なら馬車は町の入り口の馬宿に預けるんだけど、今回は特別に冒険者ギルドが場所を用意してくれた。

オフィーリア嬢の馬車と一緒に叔父さんの馬車もそこに停める。

冒険者ギルドの人たちが見張りを申し出てくれたんだけど、ジャックさんは自分の仕事なのでと  
言って馬車に残った。

僕たちはジャックさんに馬車を任せて、裏口から冒険者ギルドの中に入る。  
裏口なんて初めて使うなあ。

正面から入るには市場を通るため、護衛が大変にならないようにという配慮らしい。  
しばらく冒険者ギルド長の執務室で、お茶をいただきながら僕らが待っていると、1人の貴族が  
部屋に駆け込んできた。

ギルベルト・カーマンというこの周辺の領主をしている子爵だ。

この人は昔貴族の集まりで挨拶したことがあるし、オフィーリア嬢とも顔見知りのはず。

「ギルド長のハリー・テイラーです」

カーマン子爵の後ろからやってきたもう1人が、そう名乗った。

この人は初めて会う人だ。

さらにもう1人、僕らを家まで呼びに来た職員さんが、なぜか真つ青な表情で両手を固く握りし  
めながら、テイラー冒険者ギルド長と一緒にいた。

カーマン子爵とテイラー冒険者ギルド長と職員さんが、同時に僕とオフィーリア嬢に示し合わせ  
たみたいに、深々とお辞儀をした。

「このたびは、こちらの管理不足によりご迷惑をおかけしてしまい、大変申し訳ありませんでした。

被害の程度をお伺いするのに、職員がこちらにお呼び立てしてしまったようで、重ね重ね申し訳あ  
りません」

テイラーさんの言葉で、僕は職員さんが真つ青になっている理由を理解した。

そうか。僕はもう平民のつもりでいたから忘れていたけど、たしかに規則とはいえ、平民が貴族  
を呼びつけるなんてありえないことだもんね。普通は相手貴族側に向くはずだ。

貴族を呼びつけられるのなんて、さらに上の階級の貴族か王族くらいしかいない。

オフィーリア嬢は気にしないだろうけど、他の貴族に知られたら、間違いなく問題になるだろ  
うね。

だからカーマン子爵もあんなに焦っていたんだな。

職員さんからすれば、いつも通り規則にのっとって対処しただけなんだろうな。

でも、おそらくギルド長から事情を聞かされたからか、僕らを呼びに来た職員さんは可哀想なく  
らいガタガタと震えている。

カーマン子爵がチラリと僕らを見た。

オフィーリア嬢より立場の低い自分から声をかけられないから、こっちが話すのを待っているの  
だろうだろう。

オフィーリア嬢がそれを察して口を開いた。

「ご質問はなんでしょうか？」

「被害の程度をお聞かせいただけますでしょうか……？」

カーマン子爵は真つ青になりながら、おそろおそろ尋ねる。

僕と叔父さんが、討伐の様子と被害状況を説明して、それからオフィーリア嬢とグレースさんが自分たちの被害の状況を伝える。

話を聞いている間、カーマン子爵はずっと不安げな様子だった。

ああ、ひよっとしたら、あれを気にしているのかなあ。

僕は、とある貴族の領地に王族が避暑に行った際に、刺客が襲ってきた事件のことを思い出す。

実は、貴族や王族が訪れた場合、事前に領主にそのことを伝えていた時に限り、その地の領主に安全を守る義務が発生する。

もし自身と同等か上位の貴族が自分の領地で怪我をしたり死んだりした場合は、領主が補償しなければいけない。

だから、その時も当然護衛騎士団を組織して、王族を護衛していたんだけど、刺客を退けられずに、王族が怪我をしちゃったんだ。

結果として、その貴族は責任を取らされて、かなりの財産を没収され、かつ、爵位を下げられたって父さまが話してたっけ。

僕もその時に、他人の領地に行つてはいけなないと、父さまから教わったっけなあ。

今回で言うと、オフィーリア嬢がカーマン子爵の領地によつてきたことを気にしているのだと

思う。

でも、おそらくオフィーリア嬢は先触れを出して領主に伝えるということはしていないだろう」もし出しているとしたら、僕のところに来る前にカーマン子爵に挨拶に行っているはずだから。

そう考えると、カーマン子爵が責任を問われることはないし、そんなに恐れなくてもよさそうなものだけだなあ……。

僕がそう思っていると、カーマン子爵が今度は僕のほうに向き直る。

「それでその……。キャベンディッシュ侯爵家には、すでにお知らせになりましたでしょうか……？」

カーマン子爵がそう尋ねた。

——ああ！ オフィーリア嬢じゃなくて僕か！

僕のお父さまは、リシャール王国の魔法省大臣という国の重鎮だ。そして、代々我が家は大臣を輩出してきた家系でもある。

つまり息子である僕は、本来なら将来の大臣候補として見られているってわけだ。

その僕に怪我なんてさせたら、カーマン子爵の立場が危うくなってもおかしくないからね。

カーマン子爵はこのことを心配しているのだろう。

でも、それは僕が家を継ぐ場合の話だ。

僕はカーマン子爵を安心させるように優しく言う。

「あの、キャベンディッシュ侯爵家は弟のリラムが継ぐことになりました」

「え？　そ、そうなのですか？」

「やっぱり僕が追放されたことは知らなかったみたいだね。」

「まあ、そのうちみんなに知れ渡るだろうけど。」

「はい。だから、今の僕は平民なんです。父さまのことは気になさらないでください。何かを要求することはありませんので」

僕はニコリと笑ったけど、カーマン子爵は複雑なことを聞いてしまった、と苦々しい顔をしていた。

「な、なんかいたたまれないなあ……。」

僕、別に気にしていないんだけど……。」

「気まずい空気の中、オフィーリア嬢が話し始める。」

「わたくしたちは、特に怪我もしていませんし問題ありませんわ。先触れも出してはおりませんし、お構いなく……。それよりも、わたくし、こちらの領に住むことにいたしましたの。いづれご挨拶に伺わせていただきますので、後ほどカーマン子爵邸の場所を教えてくださいませんか？」

「こ、こ、こちらにですか？」

カーマン子爵が驚きで跳び上がった。

「ええ。オーウェンズ伯爵邸には戻りませんので」

オフィーリア嬢がカーマン子爵に微笑んだ。

「わ、わ、私の領地は、その、かなり貧民の多い地域として、あまり護衛に人手をさけるほどの、その……。」

カーマン子爵が汗ダラダラで慌て出した。

「……まあ、無理もないと思うよ。」

「ここは領民の生活に必要なものには税金をかけてないという、良心的な領地運営をしていると聞いたことがある。蓄えもあまりないだろう。」

伯爵令嬢を守るための護衛騎士団を作る余裕はないと思う。

「護衛のことでしたら、気にしていただかなくとも結構ですわ。わたくしは大祖母さまからいただいた特別な護衛がおりますの」

困った様子のカーマン子爵に、オフィーリア嬢がそう応える。

「ヒッ!!」

カーマン子爵が思わず声をあげた。

過去に王女が降嫁したことのあるオーウェンズ伯爵家は、伯爵の中ではかなり力があるんだよね。ましてや先代王の母君がつかわした特別な護衛——王家の影がついてきているってことだもの。

こう言ったらなんだけど、かなり貧乏なこの地域に、そんな特別な存在を連れた王家の縁戚なんていたら、むしろ領地が狙われやすくなるんじゃないかね。

王家の影の実力を知らない人たちからすれば、少数の護衛しかいない令嬢なんて格好の的にしか見えない。

カーマン子爵からしたって、今まで静かだった領地にいきなり火種が投げ込まれたようなものだ。安心できるはずないし、困るよね。

「そ、そうでございますか。それは、その、すごいことで……」

なんと返していいのか分からず、カーマン子爵は困った顔で汗を拭っていた。

かと言って、カーマン子爵の立場で、オフィーリア嬢の言葉を断れるはずもなく、オフィーリアがそのままこの地に住み着くことが決まったのだった。

「それでは、お先に失礼いたしますわね、アレックスさま。明日からとても楽しみですわ。ここでの暮らしについて、色々とお話していただきませぬ」

オフィーリア嬢がそう言って、馬車に乗り込む。

向かう先を見る限り、新しい我が家に帰って行った。

途中でグレースさんが離席したのは、家具とか揃えるためだったんだろうな。

本当に来たばかりですぐに暮らし始めるだなんて……。しかも、こんな辺鄙な場所なのに。

伯爵令嬢が気に入る家具なんて、売ってないと思うんだけど……。なんで住もうと思ったんだろう？

僕は叔父さんとも少し冒険者ギルドに残ることになった。

僕の討伐したデビルスネークの数の報告と買い取りのためだ。

直接解体場に行つて行つてから、叔父さんがデビルスネークをマジックバッグの中から出す。

テーブルの上に一気にドチャツと並べると、解体場の中が急に慌たしくなった。

「すまん、これ全部の査定は今日は無理だ。明後日また来てくれ」

解体担当のおじさんが額を押さえて言った。

僕と叔父さんは受付を後にして冒険者ギルドの入り口に向かった。

「明日は大きな町に出て、アレックスの弓を買いに行こう」

叔父さんがそう言った。

それからどんな弓がいかについて色々とお話してくれた。

取り回しのいい、小さくて丈夫な弓のほうが、初心者の子どもにはいいという話だ。

確かにそうだよな。大きくて重い弓を使うのは、相当筋力をつけないと難しい。

叔父さんの弓は見た目は小さいけど、叔父さん専用だからとても重たく作られている。

そんな話をしていてところで、僕はあることを思い出した。

そうだ！ ヒルデを探してたんだ。

冒険者ギルドに来たのは、ヒルデに会う目的もあった。

ヒルデはどこだろう？



こんなものを大事にする一面があっただんな……って呟いた後、叔父さんはそのガラス玉を見つめたまましばらく動かなかった。

叔父さんは僕と同じ年の時に家を出ることになったから、あんまりお祖父さまと接点がなかったんだと思うんだ。

一応結婚相手は探していたと思うけど、母さまのことが好きだったから、貴族として結婚するよりも、独身を選んだってことなんじゃないかな、って今なら思う。

父さまは叔父さんにクエストを依頼することで関わろうとしてきたけど、お祖父さまはルールを厳格に守る人で、そういう貴族のしきたりをやむやにしないからね。

僕は気が付かなかったんだけど、お祖父さまの納棺の時にも、父さまはコソソリ叔父さんに護衛クエストを依頼してたんだって。

そこで最後のお別れだけできたって、叔父さんがポツリと言った。

2人にもっと話す機会があったら、お祖父さまの叔父さんへの気持ちも知ることができたのかなあ。

「これ、もらっていいか」

叔父さんに聞かれて、もちろんだよ、と僕は頷く。

いざれペンダントに加工してもらうつもりでいるらしい。思い出の品だものね。

その後もいくつかのアイテムボックスを一緒に確認して、叔父さんと相談しつつ利用方法を考

えた。

問題は200番目のアイテムボックスから出てきた剣と、カナンンの宿ったペンダントだ。

叔父さんは剣を見て、何やらウンウンと唸っていたけど、その理由を僕には教えてくれなかった。

「とりあえず、俺がいいと言うまでは誰にも話すんじゃないぞ」

叔父さんは剣を僕に返しながら、釘を刺した。

叔父さんに分からないことは、僕にはもっと分からない。

叔父さんが念を押すつてことは、かなりの代物だろうからね。

その通りにしよう。

剣の話が落ち着いてから、僕はついでにカナンを叔父さんに紹介した。

精霊の加護なんて滅多に得られるものじゃないぞ、と、叔父さんはまたしても衝撃を受けていた。

叔父さんの話によれば、国によつてはそれだけで保護対象者になることもあるくらいらしい。

リシャーラ王国では、そこまで精霊を大切にしていないから、その扱いの差に僕は驚く。

他の国、例えば精霊信仰の強いベシヤルマイ王国なんかでは、精霊魔法使いが多いと聞く。

信仰していない、精霊に友好的でない人たちに、精霊は祝福を与えないから、リシャーラとベシヤルマイの違いは納得だ。精霊に友好的なベシヤルマイ王国だと、生まれた時点で祝福があるみたい。

精霊にはさらにその上に加護というものがあって、僕がカナンからもらったのはこれだ。

カナンみたいに、精霊が個人についてまわることもあるのだそう。

精霊はよほど力が強くないと見えないものなんだ、と叔父さんは教えてくれた。

つまりカナンは、とても強い精霊だったことだ。

人間のほうに視る力があれば、弱い精霊でも見ることができるといって、精霊魔法使いはだいたい全部の精霊が見えるらしい。

そもそも、今は現代魔法と呼ばれる、神から与えられたとされる魔法を操る人が多い。

僕の父さまが使う火魔法もそれにあたる。

だから、もしも僕がカナンから祝福を与えられて、精霊魔法によって火属性を使うことができても、残念ながら、キャベンディッシュ侯爵家の跡取りにはなれないんだよね。

これは、神でないものに与えられた力を欲してはならないという暗黙の了解があるからだ。

一方で、精霊信仰の国では、神の祝福がある存在にこそ精霊魔法は宿るもので、精霊魔法を使えなくなったのは、神に見放されているからという対極の考えを持っている。そしてそういう人たちが使っているのが、父さまたちの持つ現代魔法という扱いだ。

実際現代魔法の歴史は浅い。

精霊魔法のほうが歴史は古くて、昔はこの国の人たちも精霊魔法の使い手が多かったんだけど、リシャールでは、ある日を境にどんだん使い手が生まれなくなってきた、それから現代魔法を使う人たちが増えるようになっていったんだ。

そして精霊の力に頼らない現代魔法の使い手は、選ばれた人間って考え方が広まるようになった。今は貴族の跡取りは、現代魔法の使い手しかなれない。

僕が追放されたのもこういう背景があったからだったりする。

というわけで、リシャールで精霊の加護を持っている僕は相当イレギュラーな存在だ。

叔父さんは僕の精霊を見てから眉間を揉んだ。

「その精霊も他の人に見せないようにな」

「うん」

そこまで話してから、二人でアイテムボックスの部屋を出る。

ごはんを食べてお風呂に入ってから、あつという間に就寝の時間になった。

ベッドに入ってから、レンジア、いる？ と上に向かって声をかけてみる。

すぐに、いない、と声が返ってきた。ふふ。

レンジアはオフィーリア嬢専属の王家の影なんだけど、少し前から僕の寝室の天井にいる。

どうやら僕を見張っているらしい。

オフィーリア嬢がこつちに来たから、もう戻るかと思ったんだけど、なぜかまだ僕のところにいる。たぶんそう指示を受けているのだろう。

それにしても、なんで僕を守ってるんだらうな？

オフィーリア嬢と僕に関係があるってことは、いづれ周囲にもバレるだろうから、そのためとか？

ううん、よく分からないや。

少し考えたけど疲れてしまい、僕はぐっすりと眠ったのだった。



「ふふふ、これは良い毛並みの子が育ちましたねえ。なんて可愛らしいんですの。あなたは精鋭部隊入り決定ですね」

王家の影の1人、カナリーは指の上で、毛虫が枝についた葉を探すようにモゾモゾとつごめいている様子を見ながら微笑んだ。

「旦那さまがあなたを見たら、どんな嬉しい悲鳴をあげますことやら。楽しみですよ」

葉っぱをモシャモシャと食べている毛虫をつまみでは、コロコロと太った毛虫を選んで別の飼育箱に移して、新しい餌を入れた。

「またそんなことをしているの？ 毛虫の何がそんなに面白いのよ、カナリー。——カナリー？」

上司のマリンが声をかけるが、カナリーは毛虫に夢中で、まったく振り返らなかつた。

マリンは、ふう、とため息をつき、天井を見上げるようにして独り言のように言った。

「そういうえば、この間珍しい毛虫を山で見つけてね……。青くてとてもキレイだね」

「青くてキレイな毛虫ですって!? それはどこにいたんですの？ もちろんそのかわい子ちゃんは連れ帰ってくれましたわよね？」

カナリーは目をらんらんと輝かせながら、毛虫をしっかりと飼育箱に戻してから、即座にマリンの前に移動する。

そして、両手のこぶしをブンブンと振りながらそう尋ねた。

この速度で移動できるのは、流石に腐っても王家の影である。

隙を突かれたマリンは、少し驚いたが表情に出さずに答える。

「……やっぱり聞こえているんじゃないの。毛虫のことじゃなくても、ちゃんと返事をなさい、カナリー。仕事よ」

「——毛虫ですか!? でしたら、すぐによりすぐりの、かわい子ちゃんを見繕って……」

カナリーはさっそく飼育箱から、まるまると太ったドギツイ色の毛虫を取り出した。

「だーかーらー、どうしてすぐになんでも毛虫に結びつけるのよ！ 蟲むし使いカナリー、あなたのスキルは分かるんだけど、そればかりが私たちの仕事ではないはずよ？」

マリンがそう窘たじまめると、その後ろから追撃が飛んでくる。

「そうですよー！」

「カナリーはおバカさんなのですー！」

王家の影見習いの双子、ライムとジャファだ。

ようやくマリンの膝を超した程度の背丈しかない、幼い可愛らしい女の子たちだ。

この年齢にしてはよく口が回る生意気盛りである。

見習いなので、まだ現場に出ることは当然少ない。

だが、それでも王家の影だ。普通の子どもたちにはできないことができる。

カナリーほどではないにしても、ひと目につかぬように移動することが可能だ。

王家の影は基本世襲制だ。代々王家につかえる彼らは、そのほとんどが遠い親戚にあたる。

特殊なスキル持ちとして生まれることの多い一族であり、魔法使いはほぼ生まれない。

そして、このライムとジャファの2人は、この仕事をするにあたって最も相応しい、隠密という姿と気配を隠せるスキルを持っていた。

加えて、移動速度と全身の持久力を強化できるスキルも持っている。

幼いゆえに元々の攻撃力はないが、スピードが乗ることで威力を増すことができ、かつ2人揃うことで敵を翻弄ほんろうすることも可能だ。

まったく同じスキルを持って生まれてくるとは、将来コンビネーションを駆使して活動するのにおあつらえ向きだった。

そんなエリートな2人からすれば、日がな1日影としての仕事もせず、毛虫と戯たむれているカナリーは、理解しがたい人物だった。

だが、目にも止まらぬスピードで動き続ける2人を捕まえるのは、マリンでも至難の業だが、カナリーだけは虫の力を使って、その動きを難なく止めることが可能だ。

幼い2人がイタズラをするたびに、カナリーが駆り出されて、捕まっておシリペンペンをされるので、会うと悪態をついている。

「ライム、ジャファ……。あなたたちはどうしても、この子たちの可愛さを認めないみたいね」

「毛虫なんて可愛くないのです!!」

「そうなのです!!」

「マリンだってキレイだと言っているのに、あなたたちときたら……」

「それはカナリーが、毛虫の話をしないと、こちらを振り向きもしないからよ。私も別にキレイだと思ってないわ」

なんてこと、とカナリーは驚きに目を見開く。

「やっぱり私の趣味を理解してくださるのは、オフィーリアさまのお父さまだけですの」

ふう、とため息をつくカナリーの言葉に、マリンは呆れ顔になった。

「あなたあれ……。オーウェンス伯爵が喜んでると思ってやってたの?」

「——? もちろんそうですの。ジャックさまが私に仕事を指示する際におっしゃいましたの。カナリー、お前の毛虫で、旦那さまを喜ばせて差し上げなさい、と」

おそらくジャックは、それを比喩のつもりで言ったのであろうが、毛虫が大好きなカナリーは、

同好の士が現れた!! と、ウッキウキでオーウェンズ伯爵に毛虫を与えていたのだろう。

毎回取ってくれ! とオーウェンズ伯爵が泣きながら悲鳴をあげていたのを、喜んでるのだと勘違いしていたらしい。

「……どうしてあの阿鼻叫喚あびきょうがんの様子を喜んでると思えるのかしら」

マリンはそう言ったが、カナリーに事実は理解できないだろう。

「毛虫じゃないとすると、なんの虫が欲しいんですの? よりどりみどりですわよ!」

「虫はいらないの。コバルトのところよ。あなた、コバルトとの連絡係をなさいな」

「——連絡係?」

「オフィリアさまから求められることもあるから、虫と戯れることを許しているけど、たまには他の仕事もなさい。あなたは王家の影なのよ?」

「なのよ?」

「ですすー!」

ライムとジャファが、マリンの双方の足の脇から顔を出して言う。

嫌そうな表情を浮かべるカナリーに、マリンが言葉をつけ足した。

「ちなみに、さっき言った青い毛虫ね、コバルトが任務を行っている場所の近くの山に生息しているやつで……」

マリンはまたしても、虫の話でカナリーのモチベーションを上げようとした。

「行きましよう」

言うが早いか、場所も聞かずにカナリーは飛び出して行ってしまった。

「まったくもう……!」

「マリン! 連れて行って!」

「私たちも行く!」

「元からそのつもりよ。あなたたちも、いざという時のために、アレックスさまのお顔を覚えなくてはならないから。行きましよう」

マリンとライムとジャファがコバルトのところに着くと、カナリーはすでにその場にいた。

流石というべきか、ちゃんとコバルトの居場所を特定して、先に向かっていたようだ。

アレックスの部屋の真上にある屋根裏部屋で全員が合流する。

カナリーは蟲使いのスキル持ちだ。虫を操り、その波長を追うことができる。

知らない間に相手に虫を付け、それをたよりに追跡できるのだ。

王家の影といえども逃れることはできない。

アレックスを監視しているコバルトにも、いつの間にかカナリーは虫を付けていて監視できるようにしていたみたいだ。

突然現れたカナリーの顔を見て、コバルトは口を三角の形にした。

目を半開きにしながら、カナリーと見合っている。

「久しぶりね、変態のコバルト」

「変態違う。変装擬態。変態はお前。虫しか愛せない。気持ちが悪い」

「失礼ね！」

「こっちのセリフ」

相変わらず、この2人は仲が悪い。

「コバルトを馬鹿にしているカナリーと、カナリーを馬鹿にしているコバルト。」

どちらも引かないので、いつもこんな感じである。

「変態！ 変態のコバルトー！」

「コバルト、変態なの!?!」

「変態違う。カナリーが勝手に言っているだけ」

カナリーの言葉を繰り返して、楽しそうにキヤッキヤとはしゃぐライムとジャファに、コバルトが真顔でツツコミを入れる。

「コバルト、あなたに新たな指令がくだされたわ。とても難しい任務よ」

「新たな任務……？ 今はオフィーリアさまの命にて、アレックスさまを監視中。それはできない」

「だいたいどうぶ。オフィーリアさまの命をこなしつつ、できることよ。指令の中身は、アレックス

さまを誘惑することよ」

「ゆーわ……く……く……」

意味が分からない、とでも言いたげに、コバルトは無表情のまま首を傾げた。

無理もないとマリンは思っていた。

これまでそんな任務にあたらせたこともなければ、そのための育成をしたこともないのだから。

「これは上からの任務よ」

「コバルトがピクリと眉を動かす。

「あなたがオフィーリアさまの指示に従うこと自体、上のほうからの指示によるもの。上からの命は絶対。分かるわね？」

「分かる。けど分からない」

「どんなことが？」

「誘惑。何をすればいい」

「ああ、そつね……」

マリンは、はあ……、とため息をついた。

「アレックスさまを、オフィーリアさまではなく、あなたに夢中にさせなさいということよ。こう言えば分かるかしら？」

「分かった。やってみる」

「頼んだわよ。カナリーは、その様子を逐一報告しなさい。それがあなたの仕事よ」

「青い毛虫ちゃんはどうするんですの!？」

「……仕事をちゃんとこなしたら、山に探しに行っても構わないから……」

「それなら私も問題ありませんの!」

「コバルトがカナリーを指さす。」

「こいつ、見張り、嫌……」

「嫌でも仕方がないわ。手が空いているのがカナリーだけなんだもの」

「私だって毛虫ちゃんの研究で忙しいですの!」

「そればかりじゃ駄目ってことよ。さあ、ライム、ジャファ、アレックスさまのお顔をよおくご覧なさい。そしてしっかり覚えるのよ。いざという時のために」

「マリンは魔道具をライムとジャファに手渡した。」

「これは壁や床を透過して向こう側を見通せるものだ。」

「近付かないといけないという難点はあるものの、この仕事に便利な道具だ。」

「見るー! 覚えるー!」

「アレックスさま、カッコいい!」

「カッコいいね!」

「ライムのお嬢さんにする!」

「ジャファのお嬢さんにもするー!」

「するー!」

「駄目。アレックスさま、渡さない」

「ケチー、コバルトのケチー!」

「ケチー!」

「ちょっと、あなたたち、もう少し静かになさい。対象者が起きてしまつてしょう?」

「はーい」

「ごめんなさい」

「みんな、早く帰って。アレックスさまはコバルトが見てる。1人でだいじょうぶ。コバルトだけが見ればいい」

「コバルトが追い返そうとすると、カナリーが口を挟んだ。」

「……へえ。アレックスさまって、マルキチによく似てるのね。可愛らしいじゃない」

「似てない」

「——マルキチがなんなのか、聞かなくても分かるの? コバルト」

「どうせ毛虫」

「どうせとはなんですの! マルキチは私が世話をしている中でも、最も可愛らしい子ですのよ!」  
「アレックスさまは毛虫になんて似てない」

「似てますわよー！」

「似てない」

「——誰かいるのか？」

二人が言い争っているとき、突然ガチャッと屋根裏部屋のドアが開いた。

そこから、セオドアが注意深くあたりを見回す。

「コバルトたちは全員隠密のスキルを発動させているため、息を殺せば誰にも気付かれることはない。」

セオドアは念のため部屋の中を見回ってから、部屋を出て行った。

そんな様子を見て、マリンは胸を撫で下ろすのだった。



次の日、僕は叔父さんの馬車で、大きな町に向かっていた。僕の弓矢を買うためだ。

初めて見るところだけど、レンガ造りの背の高い建物が多くてなかなか発展してる感じだ。

町の入り口で馬車を停めて、馬宿に馬車を預けたら、徒歩で町を散策する。

宝石店なんかも結構あって、従者を連れた貴族の姿をチラホラと見かけた。

ここはアルムナイという町だと叔父さんが教えてくれる。

僕はあたりを見回して、町の景色を楽しんでいた。

「ここは鍛冶屋や道具屋の工房がひしめいている町だな。売っているものを普通に買うこともできるとし、特注品を作ってもらうことも可能だ。家具工房も有名なんだぞ」

「へえー」

「家具職人のルビリオの名前は知っているだろう？ 彼の一番弟子と言われる男が、家具工房をやっているんだ」

「あの世界一の職人の!?」

「そうだ。ルビリオの家具、づくりの技術を最も受け継いだと言われている弟子だな」

「すごい人なんだね……」

「ルビリオの家具は、最低でも小白金貨一枚と言われているから、その弟子の作品でも簡単には手が出ないが、俺は家具を見るのが好きでな。いつもこの町に来たら立ち寄ることにしているんだ。」

「ちょっと見ていこう」

叔父さんの話に興味湧き、僕たちはルビリオの弟子だという人の店に行くことになった。

ルビリオのお弟子さんの店は、工房が繋がってて、繁華街の一番奥にあった。

市場で店舗を構える時は、露店と違って、面積と場所で値段が違うのだと教わったことがある。端っことはいえ繁華街で、かつこの広さを見ると、相当代が高そうだな。

こんなところに店を構えられるなんてすごいなあ。工房もあるから、さらにお金もかかりそうだ。

それだけ売れているんだろうね。  
ドアを開けると、涼しげな鐘の音がした。

これでお客さんが来たことを知らせているのだろう。  
いらっしやい、と若い男性の店員が挨拶してくれる。

身に着けているエプロンには木くずがたくさんくっついていてから、この人も職人さんなのかもね。

店の中は木のいい匂いがして、すぐく落ち着く雰囲気だった。

僕はふと、8分の1に切った車輪みたいな形の木が足についている椅子が気になった。

……なんだろう？ これ。

「座っていただけでも結構ですよ」

店員さんがそう声をかけてくれる。

僕はお礼を言っ、さっそく腰掛けてみた。

「うわわわわっ!」

何これ!?

座った途端に、グラリと椅子が後ろに傾いて、僕は思いっきり慌ててしまった。

何この椅子! 壊れてない!

思わず椅子から立ち上がって、自分が壊したんじゃない? と思っ、椅子を振り返る。

その様子を見た店員さんが、見慣れた光景らしく、クスリと笑ってから言う。

「そういう椅子なんです。ロッキングチェアと言います。本を読みながら、ユラユラ揺れていると、とてもくつろげると好評です」

「へえ……」

そう言われて、僕は改めて椅子に腰掛けてから、ちよつと揺らしてみた。

わっ! 面白い!

それになんだか……ちよつと眠くなってきたような気が……。

「眠くなりますよね、分かります」

店員さんが笑いながら言った。

確かにこれはくつろげるなあ……。

叔父さんの家の玄関の脇にある板の上に置いて、屋根の日陰で本を読みながら、この椅子に座つてのんびりする……。

うん、いいかも。

想像を膨らませながら、僕は値段を聞いてみる。

「おいくらなんですか?」

「それは試作品なので、現品限りでかなりお安いですよ。中金貨2枚です」  
ううっ。それでも結構するなあ。

今の僕なら買えなくはないけど、買ったあと外に置きっぱなしにするのは難しいね。

かといって結構大きくて重たいし、盗まれないように毎回家の中にするのを考えたら、ちよつと面倒くさいなあ。

残念だけど、購入は見送ろう。

あたりを見回すと、叔父さんはタンスを見てみたいだった。

「気に入ったのがあったの？」

叔父さんに声をかけると。

「ああ。これが前から欲しいんだがな」

値段がタンスの上に置かれてて、小白金貨2枚と書かれていた。高<sup>た</sup>っか!!

「……買うの？」

「まあ、買えなくはないんだが、侵入者や火事を防ぐ護符がないとうかつに置けないからな。我が家を安全にするまでは厳しいだろうな」

……確かにね。盗まれかねないし、万が一燃えたら目も当てられない。

ひと財産が一瞬でなくなっちゃうよ。

「その護符っていくらするの？」

「まあ、小白金貨2枚と聞いたな」

こっちも高<sup>た</sup>っか!!

そんな高いもの、いったいどこで売ってるんだろ……。

叔父さんは世界を股にかけて冒険者ってだけあって、僕の知らないことをたくさん知ってるなあ。

「まあ、護符も買えなくはない金額だが、譲ってくれる相手を探すのが大変だな。なんせ他所の国にいろいろらしい」

……買えるんだ。

そんなことを話しながら、目の前のタンスを見てみると、僕はふと、あることに気が付いた。

……どっかで見たことあるな？

——そうだ！ 確か91番の、貴族のアイテムボックスの中にあつたタンスだ。あれも同じデザインのやつばっか入ってた気がする。

約90年前に生まれた人のアイテムボックスだから、お弟子さんのじゃないはず。

……つまりあの家具の数々は、伝説の家具職人のルビリオ本人の作品だったってこと!?

うわあ、どうしよう。

叔父さんに、買わなくても似たようなのがあるよ、って言うべきだろうか。

……叔父さんが護符を手に入れたら話してみよう。

ちなみに叔父さんの普段の生活が質素なのは、叔父さんが一点豪華主義なだけで、蓄えはかなりあるみたいだ。

冒険者を引退したのも、働かなくても食べていけるだけのお金が稼げたからだって話を聞いた。

現役Sランク冒険者ともなると、そんなに稼げるものなんだなあ。僕ももつと頑張らなくちゃ!

そんな風は無邪気に張り切っていた僕を見て、叔父さんはため息を吐いて言った。「アレックス、覚えておくんた。金持ちになるということは、とても勇気のいることだな」  
「どういう意味だろう？」

勇敢じゃないと、稼げないってことかな？

確かにSランク冒険者になるまで、きつと叔父さんには色んなことがあっただろう。

おっかない魔物と戦ったり、死にかけたことだってあったかもしれないよね。

でも、僕は冒険者にはなったけど、叔父さんみたくSランクを目指してるってわけじゃない。商人として物を売るついでに、稼げそうなものを手に入れるためだもの。

僕に勇気は必要ないと思うんだけど……。

「……やれやれ。その様子だと、よく分かってないみたいだな」

叔父さんは困ったように笑った。

「う、うん、ごめんなさい……」

「とりあえず、ここを出ようか。少しゆっくり歩きながら話そう」

叔父さんは神妙な顔つきで家具屋の扉を開けた。

結局家具は眺めただけで終わって、弓矢を見に行くために、僕たちは武器防具屋に向かう。

今向かっているのは、叔父さんの現役時代の馴染みの店の1つでもあるらしい。

叔父さんがさつそくさつきの話の続きを始めた。

「……以前お前に、塩を売るのはしばらく商人ギルドのランクを上げる時だけにしようと言ったのは、なんでだと思っ」

「取引に使うためだね？ 僕の塩は神の塩と呼ばれるほど質の高いもので、塩が手に入りやすくなった今でも取引の材料になるほどの代物だから……」

「まあ、それもあるが……今のお前の状態で、一気に大金を稼ぎすぎるのは、よくないと思っただらだ」

「僕が子どもだから？」

「まあ、近いところもあるが、もつと言えば覚悟がないからだ」

「——覚悟？」

「この世の中は、持つ者と持たざる者に分けられる。それは才能であったり、権力であったり、金であったり。その中でも特に人から奪いやすいものが金だ。持たざる者の中には、自身が努力をするよりも、持つ者から奪ったほうが早いと考える人間がいる」

「……そうかな？」

僕は叔父さんの言うことが、あんまり納得できなくて首を傾げた。

「そうだ。お前は元々恵まれた生まれだが、そうでなくとも、人から奪おうだとか、恵んでもらお

うだとか考えたことはないだろう？ 自分の努力でなんとかしようとしたはずだ」

「そうだね、うん、たぶん」

もし最初から、平民に生まれてたとしても、できることを頑張ってたと思うよ。

「それはお前に執着心がなく、身の丈に足りる現状で満足できる人間だからさ。手に入れた〈海〉にしたって、ここまでのことができなかったとしても、不満はなかっただろう？」

確かに、リアムとまた会えるようになりたいという思いを除けば、ミーニャと2人で食べていければ、それで十分だっただろうな。お金にこだわりはないかも。

「だがそうでない人間からしたら、他人が努力で手に入れた物でも、自分のほうが相応しいだとか、自分が手に入れたはずのものだったと考えるんだ」

「ええ……」

すごい人たちがいるんだなあ。

僕にはちよつと理解できないや。

でも確かに、3人組が僕を襲ってきたこともあった。

あれもそういう人たちなんだろうね。

冒険者として頑張るよりも、僕から奪ったほうが早いと考えたってことだ。

僕と幼馴染のサイラスもそうだったのかな？

オフィーリア嬢に婚約を打診してたって、オフィーリア嬢本人から以前聞いたから。

もし先に婚約していれば、自分のものにできたって考えてたのかも。

「だから必ずお前から奪いにくるやつも現れる。そのことを理解せず、身を守れるすべを身につける前に、簡単に金を稼ぐことも、稼げると知られることも避けたほうがいいのさ」

「うん、分かったよ」

きつと叔父さんはその覚悟が持てたから、冒険者を引退したんだね。

お金をたくさん持っているのに、あんな人気ひとけのないところにたった1人で住めるのも、Sランク冒険者だからなんだろうな。

Sランク冒険者を襲ってお金を奪おうなんて物好きも、そうそういないだろうしね。僕が襲われたのは、あいつらから舐められてたからだ。

たくさん稼げるところを見せたら、僕だけじゃなく、ミーニャが危険な目に遭うかもしれないよね。もしそうなったら困るよ。

「それにお前のスキルだ。そのスキルは、お前や俺たちが思っていたよりも、かなり色々なことができると思う」

叔父さんはそこで声量を落とした。

「塩と魚を手に入れられるというだけでも、国から保護される可能性があるのはお前もこの前聞いただろう？ 問題はそのスキルで攻撃が可能だということ、そしてアイテムボックスの海の存在だ」

「うん……。知られないようにするね」

「そんな単純な話じゃないぞ、アレックス」

「——え？」

「お前が持っているのは、想像しているよりはるかに大きな力なんだ。魔導師レベルの魔法使いと言っても遜色ないほどだ。それを簡単に使って見せることは——戦争をも引き起こす」

僕はゴクリとつばを呑み込んだ。

「お前はそれを自覚しなくちゃならない。突然身につけた力で実感は湧かないだろうが、それが持つ者の責務だ」

「お金と同じってことだね」

「いや、それ以上だ。周囲を守ることに、傷付けることにもなる。お金以上に、利用しようとする人間も現れることだろうな」

Sランク冒険者の叔父さんの言葉は重たかった。

叔父さんもきつと、数々のしがらみや企みを乗り越えてきたんだろう。

「変わるんだアレックス。いつまでも、子どものままじゃいけない。もう少し大人になるのをゆっくり待ってやりたかったんだが、どうもそうは言っていられないようだ」

——僕はもつと強くならなきゃ。

叔父さんを心配させないくらい。

僕を利用しようとする人たちに、変な気を起こさせないくらい。

海の水を出して攻撃できることは分かったんだし、もつと戦い方に幅を持たせられたら、自分の身を守り守られるようになるはず。

そもそも攻撃するまでに時間がかかるのをなんとかしないとイケないな。

とにかく、このスキルをもつと極めなくちゃ!!

「分かったよ、叔父さん。僕はそういう人たちに狙われないように、狙われても問題ないように、いっぱい頑張るよ。この力を持つ意味をもつと考えてみる」

「ああ。お前ならきつとなれるさ。自分もみんなも守れる、強い男にな」

そう言って叔父さんは嬉しそうに笑った。

僕はへへへ、と笑い返した。

叔父さんがいてくれてよかったな。

世間知らずの僕1人じゃ、すぐに人に騙されたり、利用されたりしてたかもしれない。

叔父さんは本当に面倒見がいい。

お世話になるまで、ほとんど家族として過ごしていない僕に対しても優しくしてくれる。

これは僕が、叔父さんが好きだった母さまの子だからということだけが理由じゃないと思う。叔父さんがそういう性格だからだ。

僕は叔父さんの忠告に心の中で感謝しながら、武器屋への道を歩くのだった。

## 第二話 初めてのダンジョン

「——着いたぞ、ここだ」

叔父さんが案内してくれたお店は、4階建てのレンガづくりの建物だった。1階と2階は武器があつて、3階と4階は防具を取り扱っているんだって。かなり大きな店だな。

大抵は剣を選ぶ人が多いから、弓矢を数多く扱ってる店はそんなにないそうだ。武器だけの店や防具だけの店も多くて、武器と防具が両方置いてある店ってだけでも、結構珍しいみたい。

「——あれっ!？」

「アレックスさま!? セオドアさま!？」

「アレックス! なんぞこんなところに!？」

ミーニヤとその父親のノイジーさんが店の中において、僕は思わず声を上げた。2人ともびつくりした顔でこちらを見る。

叔父さんは僕とミーニヤが生まれる前にキャベンディッシュ家を出て行ったから、ミーニヤは叔父さんの顔を知らない。

けど、ノイジーさんはどちらかというと叔父さんを見て驚いたようだった。

ミーニヤが目線だけでノイジーさんを見上げて、お父さんの知り合いなの? という表情になる。

「ご当主さまの弟君だ」

ノイジーさんがミーニヤにそう言うと、ミーニヤは慌てて名前を名乗りながらお辞儀をした。

「久しぶりだな、ノイジー。元氣そうで何よりだ」

「セオドアさまこそ……。お懐かしゅうございます。お元氣そうで……」

ノイジーさんは帽子を脱いで叔父さんに挨拶をすると、ちよつぱり涙ぐみながら微笑んだ。

叔父さんも嬉しそうだ。

ミーニヤは農家のノイジーさんの手伝いで一緒にいるみたいだ。

「ミーニヤとノイジーさんこそ、なんで武器屋なんか……」

侯爵令息だった時の癖で、ノイジーさんは僕にさま付けしてくるけど、特に訂正せずに話を続けることにした。

説明するとややこしくなるからね。

ノイジーさんが眉を下げながら答える。

「最近畑でウサギの被害が酷くて……。中には魔物の一角ウサギまで出る始末で困っております。ミーニヤが鑑定で弓使いのスキルをいただいたので、退治してもらおうと思って、こうして親戚の店まで弓を買いに来た次第です」

ここはノイジーさんの母親の妹さんが嫁いだお店で、他よりも親戚割引でお安くしてくれるんだとか。

ノイジーさんたちが話している間、ミーニヤが僕のほうを向いて嬉しそうな表情を見せる。やっぱりミーニヤの笑顔は癒やされるなあ。

僕も会えて嬉しいよ、ミーニヤ。

ミーニヤが見ていたのは、弓の中でも石弓タイプのもの。

僕よりも手が小さいから、初心者の女性や子どもでも扱いやすいものを探しているみたいだ。

石弓タイプのものは引き絞る力がいらず、狙いを定めて引き金の近くを押すだけで撃てるし、火力も意外と強いんだって。

僕も使ってみたいと思ったんだけど、叔父さんから、石弓タイプに慣れちゃうと、引き弓の形を覚えられないから、初めは引き弓タイプを使ったほうがいいと言われた。

最終的には引き弓タイプのほうが火力もあるし、慣れてくると5連射くらいできるらしい。

同時に撃てるってすごいなあ！

ミーニヤみたく弓使いのスキルを持っているなら、いずれスキルを使って、矢を使わずに撃てるようになるんだって。

魔弾、って言うらしい。

弓聖のスキル持ちともなると、そこに防御力低下だとかの、特別な力を加える魔弾も撃てるら

し。

弓使いは、矢の消費が激しくて、最初は火力もそんなに高くないから、あんまり人気のない職業だつて言うけど、成長すると1人でクエストをこなす人までいるんだそう。

スキルのない人間と違って、覚えるのも慣れるのも、やっぱり早いみたい。試し撃ちができたんだけど、ミーニヤは店員さんに使い方を教わらなくとも、的に当ててたよ。

真剣な表情をしているミーニヤは、とってもカッコよくて可愛らしかった。

「セオドアさん、よろしければ、お2人に弓を選んでいただけませんか？」

「俺がか？」

店員さんの言葉に叔父さんが驚いている。

もともと僕の弓は見てくれる予定だったけど、ミーニヤの弓まで選ぶのは予定外だからね。

「Sランク冒険者のセオドアさまなら、よい弓を選んでくださるでしょう」

それまで悩んでいる様子だったミーニヤは、叔父さんがSランクと聞いて目を丸くしている。

「弓は専門外だな」

叔父さんはそう言いながら、僕とミーニヤにそれぞれ弓を選んでくれた。

「ありがとうございます！」

ミーニヤが嬉しそうにお礼を言った。

自分の弓を手に入れて、ニコニコしているミーニヤ……。

立ち読みサンプル  
はここまで

かあい……。

それから、叔父さんが僕とミーニャにそれぞれ革でできた弓と矢のホルダーをくれた。

「これは俺からプレゼントさせてくれ」

弓のホルダーは肩からかけて、背中に弓を背負えるようになっていているやつだ。

腰のあたりの留め具を外すと、サツと背中から取り出すことが可能で、持ち運ぶにも、とっさに戦いたい時にも便利だね。

弓は結構重いから、背中に担げるのはありがたいな。

矢のホルダーは、腰に巻いた革ベルトからぶら下げて使うものらしい。

「そんな！ わたくしどもがセオドアさまから何かをいただくわけには……」

「なに、大したものじゃない」

恐縮するノイジーさんに、叔父さんは気さくにそう言った。

ノイジーさんからすると、叔父さんはずっとキャベンディッシュ侯爵令息だから、こういう行い

も気が引けるんだろうな。

「もらってあげてよ。その……。僕もミーニャとお揃いの物を持てるのは、嬉しいしさ」

そう言って、照れて頬をかくと、ノイジーさんは、ああ！ と納得した顔をした。

マーサから何かを聞いているのかな？

ちよっと恥ずかしいけど。

